1　研究主題について

1　研究主題

民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求
～生徒の「問い」を生み出す授業デザインの工夫～

2　主題設定の理由

（1）　研究主題設定の経緯

①　なぜ「民主主義」を掲げるのか

世界の情勢を見ると，保護貿易主義や自国第一主義など排他的な風潮が広まり，社会の分断が起こっている。さらに，パンデミックによる世界的な混乱やヨーロッパにおける軍事侵攻が我々に突きつけたことについて考えるとき，民主的な対話を重ねて打開策を見出していかなければならないことに改めて気づかされる。「民主主義の危機」が叫ばれている現代において，もう一度「民主主義」を見つめ直し，私たち社会科教師が原点にかえって研究を進めるために，「民主主義」を研究主題に掲げることにした。

②　社会科と民主主義の担い手を育てること

我々教師の使命は「民主主義の担い手」を育てることである。立場を変え，子どもたちは，なぜ社会科を学ぶのか。それは「国際社会に生きる平和で民主的な国家・社会の形成者」，すなわち「民主主義の担い手（主体）」となるためであると言える。そもそも，戦後発足した社会科は，民主主義社会の形成とその主体（市民）の育成を重視してつくられた。

民主主義を見つめ直し，「資質・能力」の育成が求められる昨今だからこそ，子どもたちが「なぜ社会科を学ぶのか」という目的意識に立ち返って研究主題を設定した。本研究会が以前から掲げてきた「未来を拓く力」[3] の中身をさらに明確化して，子どもたちが「民主主義の担い手」として育っていくために必要な資質・能力に着目した。

（2）　民主主義の担い手に必要な資質・能力とは何か

本研究会では，熊本大学教育学部教授の藤瀬泰司氏が提唱している「民主主義の担い手の育成」を参考に，社会科において育むべき資質・能力を「民主主義の担い手に必要な資質・能力」とし，具体的には次のように捉える。

> よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力

自分が生きている社会の問題について考えるとき，自分の生活との関わりや利害などを踏まえて意思決定するだけでなく，同じ社会に生きる多様な立場の人々にも目を向けることが民主的であることは言うまでもない。子どもたちが民主主義の担い手となりうるためには，自分が良いと思う解決策や行動が，

他者の生活や利害にどのような影響を及ぼすかについても考えさせていくことが大切である。さらに，歴史を踏まえ，世代を超えた他者の立場を考慮し，よりよい社会をつくろうとする姿勢や態度も含めた社会問題の民主的な解決を図ろうとする資質・能力こそが，「民主主義の担い手に必要な資質・能力」であると考える。[5)]

（3） 副題との関係

「民主主義の担い手に必要な資質・能力」には，社会の問題に気付くという過程が含まれている。社会の問題に気付くには，社会的事象に対して関心を持ち，主体的に考えようとする態度を育てることが重要である。授業の中で，「なぜこうなるのだろう」「どうすればよいのだろう」などの考えたくなる「問い」が生まれる経験，仲間と共に考えて解決する経験を積み重ねることで，生徒の社会的事象に対する関心や主体的に考えようとする態度は育っていくと考える。そこで本研究会では，民主主義の担い手に必要な資質・能力を育む社会科の探求の方法として，生徒の「問い」を生み出す授業デザインの工夫に着目することにした。

３　研究の進め方について

（1） 研究の視点　－目標・内容・方法に基づく研究－

① 授業研究の視点の転換

学校現場で通常行われる授業研究や授業構想は，多くの場合，「教師」と「子ども」と「教材」という関係の中で考えられる。教師は子どもの実態を捉え，教材をどのように具体化し，どのような方法で子どもの理解を促すかを考え，授業を構成していく。しかし，この視点のみで授業づくりを行うと，教材（例えば教科書）＝授業目標となり，特に社会科の授業においては，「教材（教科書）を教える授業」に陥ってしまう。「教科書を教える授業」では，民主主義の担い手に必要な資質・能力を育むことはできないと考える。これを図式化すると，**図１**のようになる。

授業の最終的な目的を「民主主義の担い手に必要な資質・能力の育成」とするならば，教材（教科書）は，それを達成していくための媒体でなくてはならない。すなわち，「教師が教科書を教える」のではなく「生徒が教科書で学ぶ」授業へと発想を変えることが不可欠である（**図２**）。[4)]

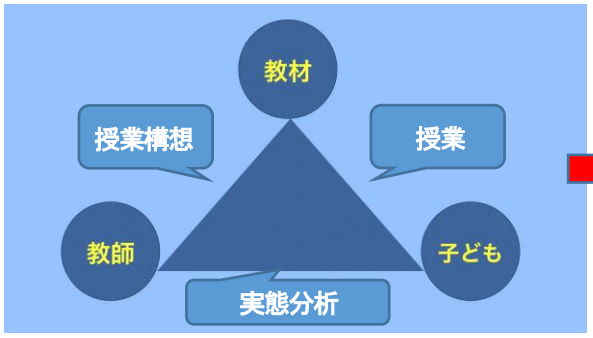

図１

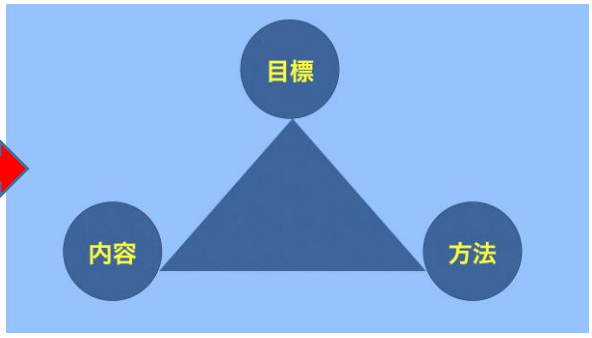

図２

② 授業研究の新しい視点

図２に照らし，本研究の視点を整理すると，**図３**のように示される。

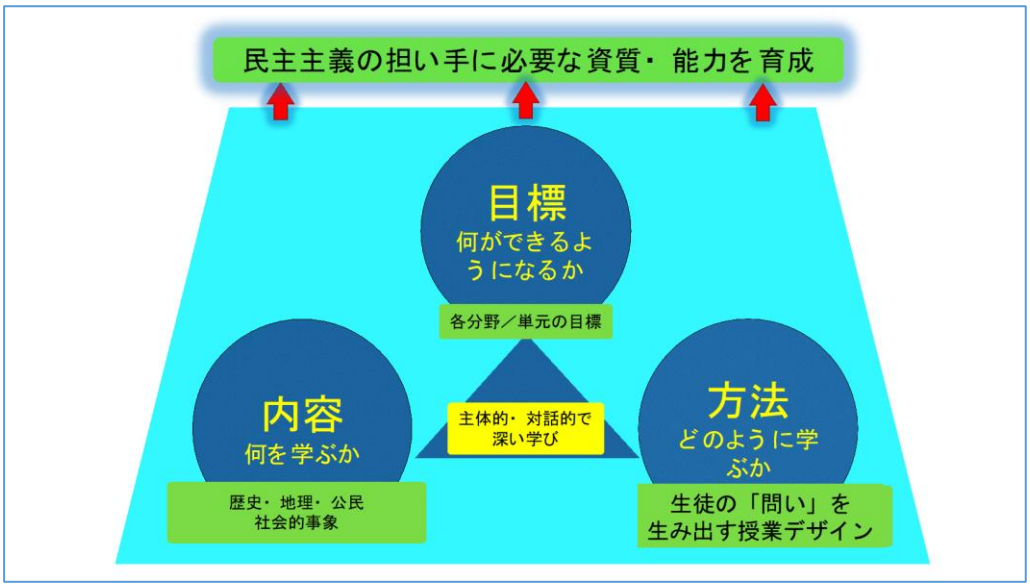

図３　本研究の視点

ⅰ）研究の目標

まず，本研究の目的は**「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成する社会科の授業づくり」**であり，**「授業を通して子どもたちの姿を変えていく」**ことである。この目的を達成するために，子どもたちが「何ができるようになるか」の目標を設定する。この目標は，個々の授業を通して変えたい子どもたちの姿であり，単元終了時の子どもたちの姿である。ゆえに，目的を常に見据えながら，教材に応じた目標の設定が必要である。

ⅱ）研究の内容

次に，何を学ぶのか，内容を設定する必要がある。本研究の内容は，**「民主主義の担い手に必要な資質・能力を育成するために，子どもたちが意欲的に学んでいくための教材」**である。ここで教材の中心となるのは，地理・歴史・公民各分野における社会的事象である。子どもたちが，授業を通して，社会的事象に対する新たな考えをもち，あるいは解釈を広げていくためには，教科書＋α（プラス アルファ）の教材を発掘・開発することが必要になる。

ⅲ）研究の方法

最後に，本研究の方法は，**「生徒の『問い』を生み出す授業デザインの工夫」**である。これについては，研究の中核として後述する。

（２）　研究の中核　－生徒の「問い」を生み出す授業デザインの工夫－

社会的な見方・考え方とは，学習の問題を追究・解決する活動において，社会的事象の特色や意味などを考えたり，社会に見られる課題を把握して，その解決に向けて社会への関わり方を選択・判断したりするための「視点や方法」である。[7]

①　「問い」の類型

生徒の「問い」を生み出す工夫は，単元や授業の導入部でしかできないわけではない。展開部や終結部でも，教師の工夫次第で「問い」を生み出すことができる。**表4**は，問いの種類と教師の工夫の例である。これ以外にも「問い」が生み出される場面や教師の工夫はあり得るので，実践を積み重ねて深化させていきたい。

問いの種類	場面	教師の工夫	備考
①学習内容に対する既有知識とのズレ・ギャップ・意外性から生まれる「問い」	単元や各時の導入・展開部	事前アンケート等で生徒の既有知識を把握し，ズレやギャップ・意外性を生む教材の準備をする	そのまま学習課題や単元を貫く課題になる場合もある
②学習課題や教師の発問を調べるための小さな「問い」	単元や各時の導入・展開部	学習課題や発問に答えるためには，どんなことを調べるべきか，視点を与える資料等を提示する	生徒が気づく視点と気づかない視点を考え，生徒が多面的・多角的に調べられる資料の準備が必要
③調べる中での矛盾に対する「問い」や異なる立場・視点に対する疑問などの「問い」	単元や各時の展開部	調査活動・調べ学習の中で，自分の予想に反することに気づかせたり，異なる立場や視点に目を向けさせたりする	議論型の授業や，ジグソー学習等で有効
④学習内容を習得した結果，新たに思った疑問や解決すべき課題に関する「問い」	単元や各時の終結部	学習内容を振り返る中で，さらに調べるべきことや疑問を出させる	次時の学習や次の単元，他分野の学習等につなげる

表4　「問い」の類型化と教師の工夫の例

② 研究主題と社会的な見方・考え方の関係

前述した本研究会が捉える「民主主義の担い手に必要な資質・能力」と，「見方・考え方」の関係は次のように示される。

よりよい社会と幸福な人生をつくり出すために，社会の問題に気付き，多様な他者と共に社会問題の解決に向かう態度および公正に判断する力

考え方：追究する方法

見方：着目する視点

「見方・考え方」は，教え込むことのできる性質のものではない。子どもたちの中にあり，働かせることで鍛えられていくものである。そして，子どもたちの中にある「社会的な見方・考え方」を働かせるような「問い」が重要である。各分野における見方・考え方をまとめると，**表５**のとおりである。

分　野	**見方（着目する視点）**	**考え方（追究の方法）**
地理的分野	位置や空間的な広がりとの関わりに着目して社会的事象を見出す。	環境条件や他地域との結び付きなどを地域等の枠組みの中で人間の営みと関連付けて考える。
歴史的分野	時期，推移や変化などに着目して社会的事象を見出す。	類似や差異などを明確にしたり，事象同士を因果関係などで関連付けたりして考える。
公民的分野	現代社会をとらえる概念的枠組みに着目して課題を見出す。	課題の解決に向けて多様な概念を関連付けて考える。

表５　各分野における見方・考え方（着目する視点と追究の方法）

（3）　研究の可視化　－学習構想案の提案－

研究の方法，「どのように学ぶか」を可視化するために，学習構想案の形式を準備し用いることにした。授業づくりにあたっては，まず，単元終了後の子どもの姿をイメージした目標を定め，教材となる社会的事象を選定し，学習内容を明らかにしていく。具体的には，次の①～③の手順で進めていく。[6)]

① 単元の学習に入る前に，子どもたちは教材となる社会的事象をどのように捉えているかを知る必要がある。そのため，日常生活や既習内容で，子どもたちはどのような知識やイメージを身に付けているか，事前アンケートを実施し，分析する。

② 単元終了後，子どもたちの社会的事象に対する知識やイメージを，どのように変えたい，あるいは広げたいのかを明確にする。これが「単元終了時の子どもの姿」（目標）となる。

③ 子どもたちの社会的事象に対する知識やイメージが「変わる」「広がる」ために，どのような教材（内容）を発掘して，どのような授業（方法）を構想するのかを具体化し，学習構想案に盛り込んでいく。

（4）　研究の省察　－事後アンケートの実施－

従来，研究授業を行った際の成果は，授業者や参観者の主観によって語られる場合が多かった。しかし，学びの主体者が子どもであり，「問い」を持つのも子どもであるならば，授業の成果を分析する際にも子どもの声を聞く必要があると考える。本研究では，事後アンケートで子どもの意見を集めることで，授業の成果と課題を分析し，授業改善や研究推進に活用していく。例として，**表７・８**に，昨年度実施された第54回九州大会（第56回熊本大会）の公民的分野における事後アンケートを示す。

単元の学習は分かりやすかったか		**単元の学習はこれからの自分のためになったか**		**消費による問題に危機感を持ったか**		**消費による問題を身近に感じたか**	
分かりやすかった	27人	ためになった	30人	危機感を持った	30人	身近に感じた	24人
どちらかといえば分かりやすかった	7人	どちらかといえばためになった	5人	どちらかといえば危機感を持った	5人	どちらかといえば身近に感じた	10人
どちらかといえば分かりにくかった	1人	どちらかといえばためにならなかった	0人	どちらかといえば危機感を持たなかった	0人	どちらかといえば身近に感じなかった	0人
分かりにくかった	0人	ためにならなかった	0人	危機感を持たなかった	0人	身近に感じなかった	1人

表７　事後アンケートの結果①

自分の消費行動に変化があったか。		**「変化があった」人は，どんな変化があったか。**	
変化があった	21人	無駄なものを買わない・エコかどうか考えて買う	10人
変化がなかった	9人	ゴミの分別をしっかりする	6人
		エコバック・マイバックを使う	3人

表８　事後アンケートの結果②

【注】

1) 高木展郎編著『「これからの時代に求められる資質・能力の育成」とは –アクティブな学びを通して–』東洋館出版社，2016年
2) 文部科学省　中学校学習指導要領解説　社会編　平成29年7月
3) 熊本県中学校教育研究会社会科部会『平成24～30年度・令和元～3年度　研究紀要』
4) 日本教科教育学会編『今なぜ，教科教育なのか』文溪堂，2015年
5) 藤瀬泰司「社会科授業研究における視点の構造転換–民主的な学校作りに寄与することをめざして」熊本大学教育学部藤瀬研究室特別講座，2016年

6）藤瀬泰司『教科書（教材）「を」教える授業と教科書（教材）「で」教える授業は，何がどう違うのか？』
熊本市社会科教育研究会主催　授業づくり研修会資料，2022 年
7）澤井陽介・加藤寿朗『見方・考え方【社会科編】「見方・考え方」を働かせる真の授業の姿とは』
東洋館出版社，2017 年

参考文献・資料

・『最新　教育キーワード　155 のキーワードで押さえる教育』時事通信社，2019 年
・熊本県教育委員会「熊本の学び推進プラン　熊本の未来の創り手となる子どもたちの学び」，令和元年 12 月
・澤井陽介・唐木清志『小中社会科の授業づくり　社会科教師はどう学ぶか』東洋館出版社，2021 年
・宇野重規『民主主義とは何か』講談社，2020 年
・宇野重規『自分で始めた人たち―社会を変える新しい民主主義』大和書房，2022 年
・昭和 23 年・24 年文部省著作教科書『民主主義』径書房, 1995 年